

持続可能な寺院のあり方

— 来たくなる本堂、ずっといたくなる本堂 —

浄土真宗本願寺派総合研究所
寺院活動支援部〈過疎地域対策担当〉

古い本堂の悩み

本堂は移築して150年が経過。本堂自体に傷みがあることに加え、構造的な悩みを抱えていました。

「この本堂は寒いなあ」「夏は、ほんまに暑い」というお声をご門徒から有ったそうです。また坊守さんからは「大きな台風が来ると心配でなりませんでした」と問題をお聞きました。

本堂をとりまく障子が外部に直接面しており、夏は太陽の光が容赦なく降り注ぎ、冬になると障子の隙間から冷たい風が吹き込んでしまうというように、天候に大きく左右される本堂。ご門徒の間で

山陽本線の姫路駅で播但線に乗り換え7駅目が溝口駅です。そこから車で10分ほど移動して、春日山城のふもと神崎郡福崎町の圓照寺（兵庫教区）に伺って、改築した本堂についてお話を聞き取りました。

も、本堂改築の機運が高まっていく中で、『宗報』で紹介された「維持可能な伽藍建設の可能性」で紹介している新しい工法による建築を見られ、今回の改築となりました。

当初はご門徒にも戸惑いがありました。というのも、古い木造建築ならではの趣深さに愛着があったからです。しかし、ご門徒と花圓清明住職が丁寧に十分話し合いを続ける中で、「やっぱり、居心地の良い本堂がよい」という結論に至りました。

工場で85%

本堂を建てたのはトヨタホーム。トヨ



85%の工程が工場で作られるため耐久性の高い建物になる

タホームは、あの世界的な自動車メーカーのTOYOTAが母体です。元々、従業員の住宅を建設していた会社だそうです。さて、トヨタホームの強みは自動車を作る技術と建築との2つの共通点がありました。

1つは「オートメーション化」された製造工程。工場で実に85%の工程が終了し、トラックで運ばれてきます。そのた

め、本堂に屋根が設置されるまで、たったの二日間しか必要ありません。

またたく間に構造が仕上がる建物は味気ないと思われる方もいらっしゃるかも知れません。しかし、ここを短時間で終わらせることによって、建物の基礎部分が雨風に晒されないという大きな利点を生んでいるのです。建てる前に建築物の構造を作る資材が濡れないことで、結果的に耐久性の高い建物になるのです。

空調はお任せ

そして、2つ目の強みは、「空調」です。「自動車と建物に共通点は少ないようですが、実はエアコンは共通しているのです。効率的で居心地の良い空間を空調によって生み出す技術をトヨタは長年蓄積してきました。その技術が、トヨタホームの強みの1つなのです。お寺の本堂のような複雑な空間だからこそ、当社の技術を活かすことができました」と営業担当の方から話を伺いました。

本堂の南側の屋根だけに太陽光パネルが設置されています。ここは入口から見えない場所なので、門から入ってきても

屋根に太陽光パネルが載っていることに気付きません。10キロワットと発電量は大きくないのですが、それでも365日、エアコンを稼働しても、本堂で使用する電力全部をまかなえ、少しずつですが売電もできているそうです。ご住職の息子さんが見ながら「いま、電気がたまっているよ」と自慢げに教えてくれました。

太陽光パネルで発電した電気によって、足下から出るエアコンの柔らかな風が本堂全体を包み込み、本堂に一足踏み入れた途端に居心地の良さが感じられるよう空調が配置されているのです。

新本堂建築のコンセプトであった「冬暖かく夏は涼しく」が実現されたのです。

開放感あふれる本堂の作り

山門をくぐると、「開かれた空間」と



開放感あふれる圓照寺本堂

いう印象を強く受けます。なぜ、こういう印象になるかというと、本堂の三方が大きなサッシで囲まれている作りのためです。本堂は、しばしば外部の人が足を踏み入れにくい印象があると指摘されます。この本堂には、その排他的な雰囲気

が感じられません。

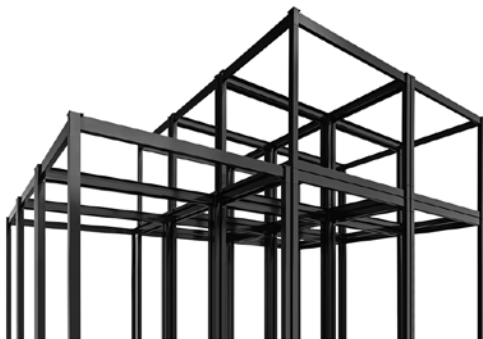
そこで、ふと心配になりました。「これだけ大きく開放的な掃き出し窓だと、ガラスの部分が多くて強度が弱いのでは……」と独り言のように呟いていると、花圓住職から「窓のサイズは関係ないのです。箱だけで強度を確保できていますから」と教えていただきました。

工場で長辺6メートル×短辺3メートルのボックスで組み立てられ搬入されます。そのボックスが積み木のように密着してならべられており、ボックスの構造だけで阪神淡路大地震（震度6〜7）の1.5倍の地震でも倒れない強さを実現できているのです。「福崎町は山崎断層が通っているのですが、この構造によって大きな地震が来ても倒れないのです」とご住職から伺いました。

そのおかげで、その他の部分は自由に作れるわけです。結果的に、大きい窓ガラスを用いて開放的な雰囲気を生み出すことに成功しているのです。



構造だけで阪神淡路大震災の1.5倍の地震でも倒れない強度を実現





新本堂に活かされた旧本堂の台高柱

接合されていない台高柱(来迎柱)

さて、古い本堂の竹まいも無くなったわけではありません。宮殿はもちろんのこと、以前は内陣を支えていた台高柱も、新たな本堂の天井には接合されていませんが、そのまま活用されています。天井絵も修復されて見事な色を取り戻し

て、新しい本堂の天井を飾っています。

古い本堂に長く通い続けたご門徒にとつても、モダンでありながら懐かしさを感じられるように工夫されているのです。

「古い本堂の雰囲気が残されているのも良いねえ」とご門徒が呟かれています。

帰りたくなくなる

最後にご門徒のお話もお聞きしました。

後堂には、ご門徒がゆっくりできるスペースがあります。納骨壇(本堂内部)の横に、小さなスペースが作られています。てつきりご講師の控室かと思ってお尋ねしたら「ここはお寺に来たみんなが、ゆっくりする場所だよ」と教えてもらいました。もちろん、このスペースにも、心地良い風が吹いています。

「家も良いけど、ここに来ると、みんなもいるし、居心地いいから帰りたくな

くなるなあ」というご意見を、最後に聞くことができました。

新しい本堂が、みんなの喜びになり、来るのが楽しみになっていることが感じられました。ご住職とご門徒、寺族の皆さんがひざを突き合わせて話し合い、「みんなの思いがこもった」居心地の良いお寺というのは、一つの理想的なあり方であると感じられた取材でした。

浄土真宗本願寺派総合研究所副所長

藤丸智雄